慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカルドオの価値論（四）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.5 (1922. 5) ,p.593(13)- 621(41)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220501-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に據りて、其の要求する扶助の甚大なる部分を相互に取得するなり。吾人は肉屋、酒屋、若しくは麵麭屋の仁愛に依つて吾人の食料を得んとするものに非ずして、唯だ彼れ等が自己の利益を顧慮するの念に訴へて之れを得んとするものなり。吾人は彼れ等の仁慈に依頼せずして其の自愛に訴ふるなり。而して彼れ等に説く吾人自身の必要を以てすることなく、彼れ等の利益を以てするなり」。(Wealth of Nations, bk.I. chap. ii.)。

即ちスミスは其の倫理學の體系を同情の原則に置くと共に、其の經濟學の體系を自利の原則に基かしめたるの觀あるなり。斯くてセリグスンの言ふが如く (Edwin R. A. Seligman, Principles of Economics with special reference to American conditions, 7th ed., 1916, p. 34)、人間行爲の二個の主たる動機は財囊と良心なり、經濟人は前者に由りて代表せられ、倫理人は後者に由りて代表せらる、而して經濟學と倫理學とは互に相交渉する所なしと做すの觀念を生ずるに至れり。洵に「國富論」が「道德的情操論」の同胞愛若しくは同情を殆んど全く包有することなく、主我主義的なるマンチエスター學派の聖典と爲れるの事實に對して疑念を抱く者少なからざる可し。然れども本原に遡りて善く此の兩著の關係を探究する者に取りては解決は想像せられたるよりも遙かに容易なるものなくんばあらず。（未完）

リカルドオの價値論（四）

小泉信三

（十二）

Principles は一八二一年の早春其第三版を出したり。Ricardo は意の如く其價値論の稿を改むるに遑あらざりしも、猶ほその「價値の難問題に關する……意見を舊版に於けるよりも十分に説明せんと努め」、之が爲め「第一章に若干の增補を加へたり。」而して此增補の如何なる性質を帶ぶるものなるかは既揭著者の書簡を讀める者の既に推測し得るところならん。Ricardo は舊版に社會發達の初期に於て單に貨物の交換價値は勞働量に依りて、若しくは一に solely 勞働に依りて定まると云ひしを殆ど專ら almost exclusively 勞働に依りて定まると改め (Principles 3rd ed. pp. 3, 13)、舊版に於ては五小節に分てる同章を七小節に分ち（註）就中貨物の價値は費されたる相對的勞働量に依りて決せらるとの原則の、固定資本使用と流動資

本回轉の遲速との爲めに修正されざるべからざるの理を説明すること詳細を加へたり。而してその到達せる結論は、利潤は勞働量と相並んで貨物交換價値を左右する原因たるものなれども、たゞその有力の程度に於て後者に遜ると謂ふこと是なり。

註、Principles 第二版と第三版とに於ける第一章小節の區分の相異を示せば左の如し。

第二版	第三版
第一節	第一節
一貨物の價値、即ち之と交換せらるべき他の貨物の量は貨物生産に必要なる勞働に由りて定まりて、その勞働に支拂はるる報酬の多少に由ることなし。	同上
第二節	第二節
資本の蓄積は前節に述べたる原則を變ふることなし	品質を異にせる勞働は異なる報酬を受くと雖も、是は貨物の相對價値變動の原因たることなし
第三節	第三節
前節に述べたる原則は固定資本として機械の使用せらるることに依て大に修正せらる	啻に直接貨物に加へられたる勞働の其價値を動かすのみならず、斯る勞働の援助せらるる用具、道具及び建物に投ぜられたる勞働も亦價値に影響す
第四節	第四節
價値は貨銀の騰落と共に變動せずとの原則は、また資本耐久力の一ならざることと、及びその投資者に復歸するの遲速に依て修正せらる	貨物の生産に投ぜられたる勞働量は其價値を左右すとの原則は機械及び其他の固定耐久資本の使用に依て大に修正せらる
第五節	第五節
常に價格を表現すべき仲介物たる貨幣の價値變動より生じ、又は貨幣を以て買はるる貨物の價値變動より生ずる樣々の結果	價値は貨銀の騰落と共に變動せずとの原則は、また資本耐久力の一ならざること、及びその投資者に復歸する遲速に依て修正せらる
	第六節
	不變の價値尺度に就て
	第七節
	常に價格を表現すべき仲介物たる貨幣の價値變動より生じ、又は貨幣を以て買はるる貨物の價値變動より生ずる樣々の結果

即ちRicardoは第一第二兩版に於けるが如く、先づその當然勞働價値説と稱せらるべき、學説を述べたる後、第四第五兩節に於て此原則の行はるべき場合を制限す。その謂ふところに從へば、生産物の價値が投下勞働量に比例し、或は是と共に增減するは、(一)生産上勞働のみを投じて機械を用ゐず、而してその市場に搬出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合、及び(二)生産上に用ゐらるゝ固定資本が、價値及

び耐久性を同じうする場合に限られ、(p. 28) 此以外の場合に於ては、價値は敢て投下勞働量の增減を待たず、賃銀の變動(即ち利潤率の變動)に由りて變動するものなり。彼れはその既にMcCulloch宛の書簡中に擧げたるものと類似の例を引きて此理を説明す。甲乙二人あり、各一年間勞働者百人を雇傭して機械を造らしめ、更に丙ありて同く一年間同數の勞働者を傭ひて穀物を作らしめたりとせよ。一年の終りに於て、甲乙の機械と丙の穀物とは何れも同一勞働量の生産物なるを以て、其價値相等しかるべし。然るに第二年に於て甲乙二人は其の第一年に造らしめたる機械を利用し更に各一百人を傭ひて、甲は羅紗、乙は綿布を織らしめ、丙は前年と同じく引續き一百人の勞働者をして穀物を作らしめたりとせよ。今投下勞働量のみを念頭に置きて考ふるときは、甲の有する機械と羅紗との價値合計、若しくは、乙の有する機械と綿布との價値合計は、何れも丙が第二年に於て作らしめたる穀物の價値の二倍なるべき筈なれども、甲の機械と羅紗、又は乙の機械と綿布とは穀物の價値の二倍以上なるべし。蓋し、毛織業者及び綿織業者の資本に對する第一年間の利潤は其資本に加へらるゝに反し、農業家のそれは消費せられ享樂せられたるを以てなり。「されば彼等が資本の耐久度異なる爲め、或は畢竟此と同一事なる、一類の貨物の市場に搬出せらるゝに先だちて經過せざるべからざる時間の爲め、彼等(機械と羅紗と又は機械と綿布と)の價値は正に之に投ぜられたる勞働量とは比例せざるべし。價値最も大なるものゝ、市場に搬出せらるゝ迄に經過せざるべからざる一層長き時間を償ふ爲め、一に對する二たらずして、多少之よりも大なるべし」。假に一勞働者に支給せらるゝ賃銀は年額五十磅、利潤率は一割なりとせば、第一年の終りに於る機械並に穀物の價値は、共に等しく五千五百磅(賃銀總額五千磅に、是に對する一割の利潤五百磅を加ふ)なるべしと雖も、第二年の終りに於ては、丙の穀物は其價値依然として五千五百磅なるべきも、甲及乙の生産物は之に加算するに、第二年の始めに方り、既に存したる機械の價値(五千五百磅)に對する利潤五百五十磅を以てせる六千五十磅を以て之を賣らざるべからず。然るに今賃銀騰貴するときは、羅紗と綿布とは爲めに同一の影響を受くべきを以て、其相互の比價不變なるべしと雖も、穀物と羅紗、又は穀物と綿布との比價は之が爲めに變動して羅紗綿布は比較上下落す。Ricardo に從へば、賃銀の騰貴は、利潤の下落なくして起

ることなし。今上記の例に於て賃銀騰貴の爲めに利潤率は一割より九歩に低落したりとせば、穀物は依然五千五百磅なるべきに反し、甲と乙との生産物は六千五十磅たらずして、五千九百九十五磅（5500×1,09＝5995）たるべければなり。（姑らくRicardoの計算に從ふ。正しくは、利潤率低下後に於ける比價は、穀物の五千四百五十磅（5500×1,09＝5450）に對し、羅紗若しくは綿布五千九百四十五磅（5500×,09＋5500×1,09＝5945）たるべきにはあらざる乎）故に曰く「勞働（價値）の騰落に基づく貨物の比價變動の程度は、投せられたる全資本中固定資本の占むる比例の左右するところたるべし。甚だ高價なる機械を以て、若しくは甚だ高價なる家屋内にて生産せられ、又はその市場に搬出せらるゝ迄に長時間を要する一切の貨物は其比價下落すべく、之に反し凡て主として勞働に依て生産せられ、若しくは速かに市場に搬出せらるべきものは比價騰貴すべし」と。（pp.－32）

右に述ぶるところは、同額の資本の之を構成する固定資本と流動資本との比例一ならざる場合に就ての論なれども、素とRicardoに從へば、固定資本の耐久性減少するに連れ、其性質流動資本に接近し來るものなるを以て、同一の理はまた資本構成部分の比例は同一なるも、固定資本の耐久性同一ならざる場合に適用せらる。即ち「賃銀の騰貴、別の語を以て謂はゞ利潤の下落は、必ず貨物の耐久的なる資本を以て生産せらるゝものゝ比價を低下せしめ、比較的消耗し易き資本を以て生産せらるゝものゝ比價を比例的に騰貴せしむべく、賃銀の下落は正に反對の結果を生ず」るなり。（p.－37）

（十二）

斯くの如くRicardoは今生産に要する時間或は利潤率の、投下勞働量と相並んで別に貨物の價値を左右するの原因たることを説明するに甚だ努めたりと雖も、此二者の輕重如何と云ふときは、投下勞働量の重くして、生産に要する時間の要素の輕きことを明言して憚らざるものなり。これより先きRicardoは單純なる勞働價値説を固持せんとするMc Cullochに對しては、價値決定原因の勞働量の一ならずして、是と生産物の市場搬出に要する時間との二なることを反覆力説せること前述の如くなれども、是と同時に勞働價値説の反對者たるMalthusに對しては、勞働價値説の最も眞理に近く、賃銀即ち利潤の變動より生ずる價値の變動の甚だ輕微に

過ぎざることを切言せるは看過すべからず。即ち一千八百二十年十月十日、彼れは Malthus に與へたる書簡中、後者の批評に答へて。曰く「貴下は『僅少の例外の外、貨物に投ぜられたる勞働量は是等のものゝ相互交換せらるゝ比率を決すと謂ふ予の主張は根據充分ならず』と謂はれたり。予も亦その嚴格に眞ならざることは之を認むと雖も、予の聞知する限りに於ては、その相對價値測定の尺度として最も眞理に近きものなることを云はんとす。貴下は需要供給價値を左右すと云ふも、前段述べたる理由に基づき、此は何事をも意味せずと信ず。價値を左右するものは供給にして、供給其者は比較的生産費に依て支配せられ、貨幣に現はされたる生産費は、勞働の價値と並に利潤とを意味す。今假に予の貨物と貴下の貨物と同價値なりとせば、其生産費は同一ならざるべからず。然るに生産費は多少の差錯を以て、投ぜられたる勞働と比例す。予の貨物も貴下の貨物も共に其價値一千磅なり、故に二者は恐らく各同量の勞働の體現せられたるものなるべし。此學説は、之を比較せらるゝ諸貨物の絶對價値同額測定の用に充てずして、時々相對價値上に起る變動測定の用に充つるときは、異論を受くるの餘地尠なし。是等の變動は何の原因（予の意味するは永續的原因なり）に之を歸すべきか。二原因に、而して二原因にのみ之を歸すべし。其効果重大ならざる一原因は、賃銀の騰貴若くは下落、或は予の畢竟此と同一事なりと認むる利潤の下落若しくは騰貴にして、極て重大なる一原因は、諸貨物生産に要せらるべき勞働量の大小是なり。此の第一の原因よりしては大なる結果生ずることなし。利潤其者は價格中の一小部分を成すに過ぎずして、是が爲めに其の大に增減することなきを以てなり。然るに第二の原因に對しては際限を附すること能はず。諸貨物生産に要せらるゝ勞働量は變動して二倍若しくは三倍することあるべきを以てなり」（Letters to Malthus, pp. 175-6）。而して曩に Mc Culloch に對しては其價値論の章を書き改めんと欲すと云ひし Ricardo が、Malthus に向ひては「予の第一章は大に變更せらるゝことなかるべし、原理上に於ては全然變更せられざるべしと信ず」（p. 177）と云へるは注目すべし。今 Principles に於ても（pp. 32-3）彼れは賃銀即ち利潤の變動より生ずる價値の變動は比較的輕微なりとし、貨物の價値變動の原因を考ふるに當りて「勞働（の價値）の騰落に由て生ずる効果を全然考慮せざるは失當なるべしと雖も、是を大に重要視するこ

とも亦等しく合正ならざるべし」と謂へるなり。故に Principles の後章に於て、彼れが價値の上に於ける大なる變動は生産上に要せらるゝ勞働量の變動に基づくものとして立論せるはその輕忽に出でたるものにあらずして、熟慮の結果なることを認めざるべからず。(Hollander p. 110)但だ是は價値變動の原因として重きを投下勞働量の增減に置くと云ふに止まり、彼れが是を以て唯一の原因となしたるにあらずして、原理上利潤の是と相併んで價値決定の要因たることを確認せるは上に詳述したるところに由て疑ふべからざるなり。

（十三）

第六節に於ては不變の價値尺度なる問題論ぜらる。謂へらく、若し其自體の價値不變なる標準尺度あらば、諸貨物の價値變動したる場合之に照らしてその何れの眞價値 real value が騰貴し、何れの眞價値が下落したるかを確知することを得べしと。然れども、Ricardo の見るところを以てすれば、此の如き標準尺度は之を求めて得ること能はず「何となれば、其自體その價値を確かめんとする諸物と同じ變動を蒙らざる貨物なるものあることなきを以て、即ち其生産に要する勞働の增減することなきものあらざるを以てなり」。而して姑らく此原因より生ずる變動を除外するも、猶ほ標準たるべき貨物と、之に依てその價値を測定せんとする貨物との間に於て、生産上に用ゐらるゝ固定資本と流動資本との比例、固定資本の耐久力の異同及び生産物の市場に搬出せらるゝに要する時の長短に基づき、賃銀の騰貴に由て生ずる價値の變動を免るゝこと能はざるを以てなり。たゞ Ricardo は金の價値の變動を免れざることを充分容認しつゝ、姑らく之を不變と假定し、(貨幣)價格の上に於ける變動を凡て貨物の價値の變動に出て生じたるものと見做すことを便宜とするものなり (p. 45)。

此の價値の不變尺度の問題と關聯して起るは、Ricardo の論究の目的が果して貨物の相對價値にあるか、將た絶對價値にあるかの疑問是なり。上に述ぶるところに依れば Ricardo が主張するところは、貨物の交換價値又は相對價値、即ち一貨物の幾許量が他の貨物と交換せらるゝやの規則は、その各自に投ぜられたる比較的勞働量之を決すと云ふに在り。而して彼れは曾にその論ずるところが、「貨物の相對價値の變動の効果に關して、その絶對價値の効果に關せざる」ことを明言するのみ

ならず、(p. 15)、更に「予は一貨物は一千磅を要すべき勞働量を投ぜられ、他の貨物二千磅を要すべき勞働量を投ぜられあるを以て、一貨物の價値は一千磅、一貨物の價値は二千磅なるべしとは云はず、ただ兩者の相互に對する價値は二と一との比なるべく、此比例に於て兩者交換せらるべしと云ひたるのみ。此學說の眞僞に對しては、此貨物の一方が、一千一百磅に賣られ、他方が二千二百磅に賣らるゝか、或は一方が一千五百磅にして他方が三千磅なるかは重要事にあらず……予はたゞ彼等の相對價値が、その生產に投ぜられたる相對的勞働量に由て支配せらるべきを主張するのみ」(p. 46)と云へるを以て、此限りに於ては其目標が貨物の相對價値に存じたること疑なきに似たり。然るに今價値の不變尺度を論ずるに當て、彼れは一物の生產に投ぜられたる勞働量は、他物の生產に投ぜられたる勞働量と關係なく、單獨に其物の價値を決するものゝ如く說けり。念頭に置けるものが物の相對價値ならば、其自體の價値の不變なる一物を求むといふこと既に意義を成さざるに似たり。相對價値は一貨物と他の或貨物と相對することに由て現はるゝものなるを以て、一物の價値の變不變を云ふには、その如何なる貨物に對する價値なるかを附加せずんば意義を成さゞるなり。所謂價値の不變は、特定の貨物に對する交換比の不變の謂か。果して然らば、所謂價値不變の貨物は他物の價値昇降を測定する尺度たること能はざるべし。また價値の不變は一切貨物に對する價値の不變なることを意味すとせば、假令該貨物の生產に要する勞働量には增減なきも、他の何れかの貨物の生產費に增減あるときは、其價値は不變なること能はざるべく、又該貨物の生產に投ぜらるゝ勞働量は增減するも、他の貨物に費やさるゝ勞働量にして同じく增減せば、其價値當然不變なるべし。故にRicardoが其自體の生產に要する勞働量に增減なく、從て價値不變なる貨物を求め得ば、是に照らして他の諸貨物の眞價値の昇降を測定することを得べしと謂ふに方り、その所謂價値又は眞價値は、一貨物が、例へば其生產に勞働の費されたりと云ふが如き一定の條件を充たすことに由り、他の貨物との關係を離れて、單獨に得喪する絕對價値の義なりと解すべき根據なきにあらず (Liebknecht S. 34-5, 92)。更に此解釋に加勢するの觀あるは第廿章「價値と富」。其特質」に關してRicardoが述ぶるところの說なり。

Ricardoに從へば富と價値とは相背馳す。彼れはAdam Smithの所說に從ひ、人の

貧富はその人生の必要品便宜品及び娯樂物を享受するの程度如何に由りて岐るゝものとなすを以て、彼れの所謂富裕は、使用價値の豐富なることを意味するものと解すべし。然るに貨物の價値は、其生産に要する勞働量と共に增減するを以て、技術の進歩に由りて貨物の生産容易となるに連れ、財の供給は益々豐富となると同時に其交換價値は益々下落すと云ふものなり。たゞ此理を說くに當りて、彼れは絕對價値を念頭に置きて、一定量の勞働の投下は必ず單獨に一定額の價値を生ずと解したるものゝ如き言明を敢てせるなり。即ち「價値は本質上富とは異なれり。價値は豐富の左右するところたらずして、生産の難易の左右するところなるを以てなり。製造業に於ける一百萬人の勞働は常に同額の價値を産出すべし」と雖も必しも常に同量の富を造らざるべし。機械の發明に依り、技巧の進歩に依り、分業の改善に依り、若しくは一層有利なる交換を行ひ得べき新市場の發見に依り、一百萬の人は一社會に於けるよりも他の社會に於て二倍若しくは三倍額の富、即ち必要品便宜品及び娯樂物を生産すべしと雖も、彼等は是が爲めに何物をも價値には加ふることなかるべし。云々」と云ひ（旁點は予の附するところなり。p. 320）、又「有ゆる時に於て之を生産する爲め煩勞と勞働との同一犧牲を要する貨物のみ不變なり」と（p. 232）云へるは是れなり。是はその論ずるところが「貨物の相對價値の効果に關して、その絕對價値の効果に關せず」と云へる言明（揭出）と相容れざることを明なり。後に Ricardo の反對論者 Samuel Bailey は此點を指摘す。即ち Ricardo が前に引けるが如く「有ゆる時に於て之を生産する爲め煩勞と勞働との同一犧牲を要する貨物のみ不變なり」と云へるを評して曰く、「然れども價値が一の關係 relation を現はすに過ぎざるものとせば、此句は眞なること能はず。吾人は問ふことを得べし。何に對する關係に於て此商品は不變の價値を有すと云ふかと。相關物は果して何ぞ。それは他の有ゆる商品と比較して同價値を有すべきか。或は然らん。然れども其の然る所以は、その勞働の不變量に由りて生産せらるゝことには存せざるなり。奈何となれば、假りに勞働は此場合に於て依然不變量たるも、他の商品に投ぜられたる勞働量にして增減あらんか、一商品と自餘一切の商品との價値關係は、Ricardo の學說に基づき直ちに變動すべきを以てなり」と。（A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo

and his followers. By the Author of the Essays on the formation and publication of opinions etc., London 1825, citiert bei Diehl I. S. 23) 彼れは又 Ricardo 及び其嘆美者 De Quincey の念頭には、「一個の積極價値 positive value の觀念浮動せることを難じて、「兩論家の疵病は明かに價値の本質を解すること不精確なるより生ずるものなり。價値を見るに二物間の關係を以てせずして、彼等は一定勞働量に依て生ずる積極的結果として之を見たるが如し。」「此學説に從へばAとBとの價値は相互に製作勞働量と等しき關係をなし、或は……製作勞働に依て決定せらるゝの故を以て、彼等はAの價値は何等他のものに關係なく、單獨に其製作勞働の量に等しと論結したるものゝ如し。」と云へり(citiert a. a. O. S. 23-4)。

此批評には根據なしと云ふべからず。Diehl の如きは是に對して辯じて Ricardo の眞意の誤解の餘地なく、その説明せんと欲するところは、一貨物Aが他の貨物と比較して幾許の價値を示すかに在りて、Aが其自體幾許の價値を示し、若くは含有するかに存せず、此點に關して異論を招くは、Ricardo の語法嚴密ならざるの罪に歸すべく、上に引用せる諸章句はたゞ二貨物の比價變動せる場合、その一方の生產に要する勞働量に增減ありて、他の一方には增減なしとせば、變動の原因は彼れにありて此れに存せざることを謂はんとするに過ぎずと謂へり(a. a. O. S. 24-8)、固より Ricardo が詳論するところの相對價値にありて、絶對價値にあらざりしことは論なしと雖も、絶對價値の觀念が全然彼れの念頭に存することなかりしと云ふは稍々過ぎたるを覺ゆ。上記の引用句に照らして、彼れの相對價値論の底に稍々茫漠たる一種の絶對價値論ありたるものと解するは決して不當と評すべからず。たゞ絶對價値を論じて、一定量勞働の體現せられたる貨物は其自體單獨に一定額の價値を有すと主張せんが爲めには、先づ異種の勞働を一の標準勞働に約元して、その一定量を以て直ちに一定額の價値を生み或は含むものとなさゞるべからざるに、既記の如く(本誌前號三九—四〇面) Ricardo は輕く此問題の表面に觸れて通過したるを以て、彼れの絶對價値論は遂に成形發展するの基礎を得ずして終れりと云ふべきなり。

これを Principles 第三版に現はれたる Ricardo の價値學説とす。

（十四）

Principles 第三版以後其死に至るまでの Ricardo が思想に就て記すべきものは、一方に於ては依然投下勞働を以て嚴格なる價値尺度となす McCulloch（及び Mill）と他方に於ては新たに支配せらるゝ勞働を以て確實の尺度となすに至れる Malthus とに對する論爭の、今其尺牘集に殘れるもの是なり。此論爭に於ける Ricardo の態度は著しく否定的なり。彼れは精確なる價値尺度の求め得べからざることを認め、自說の正しきことを主張するよりも、論敵の說の更に一層謬れることを力說したるなり。

James Mill は Ricardo が投下勞働量と相併んで生產に要する時間の同じく價値決定の原因なることを明認したるに贊同せず、その Principles 第三版の踵に接して出でたる Elements of Political Economy, 1821 に於ては嚴格なる勞働價値說を主張して僅かに「等量の勞働を秤量するに方りては其難易及び熟練の程度の斟酌せらるべきこと勿論なる」を認めたるの外、此原則に對する例外を容認せず。資本は畢竟保藏せられたる勞働「hoarded labour に過ぎずして、其自體前の勞働の結果にして、直接勞働援助の具たるか、或はその之に投ぜらるゝ主體なるか、孰れかに外ならずと云ひ、「されば勞働量は究局貨物相互の交換の比例を決定すること證據最も明白なるが如し」と斷定したるなり（Hollander, pp. 110-1）。McCulloch に對しては Ricardo が價値を決定するものゝ決して投下勞働量のみにあらざることを反覆力說せること既記の如くなるに拘らず、前者は遂に其師と說を同うするに至らずして、二者間には見解の相違依然として存したるなり。即ち千八百二十二年の始め McCulloch が人を以て其講義の原稿を示したるに對し Ricardo は答へて、貴下は諸貨物の價値を測るに、其生產に要せらるゝ勞働量を以てすること少しく予に過ぎたり。貴下は何等の例外又は制限を認めさるが如しと雖も、予は常に貨物相對價値上に於ける變動の或者は、之を其生產に必要なる勞働量以外の原因に歸し得べきこと容認するを辭せざるものなり。假に百個の煉瓦の、高價なる機械を用ゐて生產せられたるモスリンの一定量に對する相對價値變動したりとせば、こは二原因の何れかに之を歸することを得べし。二貨物の何れかを生產する爲めに要せらるべき勞働に增減あるか、或は賃銀の一般的に騰貴若しくは下落したるか何れかなるべし。第一の事が變動の原因たることに關しては、貴下と予と全然同意なるも、貴下は煉瓦

とモスリンとには各々同量の勞働投ぜらるゝに拘らず、一に勞働の價値の騰落の爲めに二者の相對價値の變動し得べきことを容認せられざるに似たり。而かも予を以て見れば、此事實は動かすべからざるものゝ如し。予は此の第二の原因に對して重きを措くこと、Malthus 氏及び其他諸氏の如くにはあらずと雖も、亦全然目を之に對して閉づること能はず」と云ひたり(Letters to McCulloch, pp. 131-2)。彼れは McCulloch の説を以てしては葡萄酒の久しく貯藏せられ、樫樹の植付けられてより後年を經て其價値を增すの理を闡明すること能はずとなすものなり。即ち千八百二十三年八月八日付の書簡に於て、「予は三四年間窖中に貯藏せられたる葡萄酒、若しくは當初勞働上に於ては恐らく二志をも費やさずして而かも百磅の價値あるに至れる樫樹の難問に克つこと能はず」と云へり。McCulloch の説明は三年間貯藏せられたる一樽の葡萄酒よりも、多くの勞働の之に費さるゝことなしと雖も、此の時間に基づく價値の增加は、同額の資本が現に勞働の雇傭に充てられたる場合、同時間内に行ふべき蓄積に由て之を算定せざるべからず、又二百年間生長せる樫樹に現に費されたる勞働量は極めて僅少なりと雖も、其價値は投下せられたる當初の勞働が同時間内に生ずべき資本蓄積に由て之を算定せざるべからずと謂ふにあるなり(Letters to Malthus p. 222)。然れども Ricardo は固より此説明に滿足せずして曰く、「吾人は何れも……二者の複利法に由る年々の累積が終に一百磅を生ずべく、又利潤の均一を維持する爲め爾かせざるべからざるを認むと雖も、予は此蓄積利潤を呼ぶに勞働の稱を以てし、又斯くして一百磅の價値ある貨物を、之に投ぜられたる勞働量に比例して價値ありと云ふことの適否を疑ふものなり。始めに勞働の爲め二者を費し、後に百磅の價値を有するに至れる此樹には、斷じて其價値二者以上の勞働の投ぜられたることなきなり。――一人の勞働に依て五十二週間内に生産せられたる一貨物は、五十二人に依て一週間内に生産せられたる別の貨物よりも價値多く、又價値多からざるべからず。貴下は曰はん、然り、使用五十二週間に亘れる資本は、使用一週間に亘る資本よりも勞働を雇傭すること多きが故にと。然れども是等二貨物には、事實上等量の勞働存するに過ぎざるなり。……問題は一貨物を不變ならしむるに必要なる諸事情は何ぞと云ふこと是なり。蓋しこれ當に吾等の尺度の性質たるべきものなるを以て

なり。是れ一切の價値尺度がそれに依て驗せらるべき試金石にして、予は貴下が提議する何れの尺度をも是に照らして之を驗せざるべからず。貴下にして『予の知れる一切貨物、一定時間勞働の之に投ぜられ、且つ常に勞働の同一量を要するものは、最好の價値尺度なり』と云はゞ、予は貴下に同意すべし。然れども貴下は之を批難の餘地全く存せざる尺度として之を提議すべからず。若し爾かせば、Malthus は予が彼れに對して用ゐる論法を以て貴下に酬ゐ『若し君の貨物にして日傭勞働に依て海濱上に採取せる予の小海老若しくは金に對する好尺度たらば、何ぞ予の尺度（斯くして採取せる小海老又は金）の君が貨物に對する好尺度たらざることあらん』と云ふべし。……吾人が麻布一片の長を測るや、その長のみを測り、而して之を行ふに不變の長さを有する一貨物に依てす。然るに價値は有りと有ゆる比例に混合せる賃銀と利潤との二要素の複合より成れるを以て、貴下の尺度が、測定せらるゝ貨物と賃銀利潤の比例に於て精密に一致するにあらずんば、之を精確に測定せんとするも能はざるなり。賃銀のみを含みて利潤を含まざるは Malthus の尺度にして、こは勞働と利潤とを共に含める諸貨物に對しては精確の尺度たらざるなり。……若し勞働のみに依て生産せらるゝ貨物最多數ならば、予は Malthus の尺度を取るに躊躇せざるべしと雖も、事實は反對にして、大多數の貨物は一定時間に亘り、勞働と資本との結合に依て生産せらるゝを以て、予は予の撰擇せるところに改むべきものを有せず。予は之を中庸と認む。Malthus の尺度は權衡の一極端にあり。老檜樹は他の極端にあるものなり。一方に於ては勞働の外何物も存せず、他方に於ては殆ど何等の勞働なくして利潤よりせる資本の蓄積あるのみなるを以て、二者は共に價値の尺度たるに適せざるものなり」と。Ricardo は究局「數學的精確」を有する價値尺度は之を求め得べからず、予の見るところを以てすれば、吾人はたゞ不完全なる尺度中に於て撰擇をなし得るに過ぎず、本來完全なる尺度なるものの存せざるを以て、吾人は斯るものを求むること能はざるが如し」との結論に到達せるなり。（Letters to McCulloch, pp. 174, 175, 176, 177）

（十五）

Malthus に對する論爭の究竟到達するところも亦同じ否定的結論なり。

Malthus はこれより先き其 Principles of Political Economy に於ては穀物と勞働との價

値の平均を價値の尺度たらしむべしとの説を立て(Sect. VII)、Ricardo の容認を肯んぜざるところたりしが、後に至りて Adam Smith と同じく「支配せらるゝ勞働」が價値の好適尺度なることを認むるに至り、Ricardo の死後著はされたる Definitions in Political Economy 1827 中に「…一貨物が支配すべき勞働、若しくは其爲めに買手が敢て投ずることを辭せざる勞働は、其の上に作用する有ゆる價値原因の――貨物の交換に際し人心上に作用する一切諸多の考慮の結果を測定す」(p. 221)「一地一時代に於ける一貨物自然價値の尺度は、其地其時代に於てその自然普通の狀態にあるとき其貨物と交換せらるべき勞働量なり」(p. 243)と云ひ、又尺度たるべき標準勞働を最品質低き普通農業上の日傭勞働に求めたり (p. 257) しか、既に Ricardo の生前に於ても The Measure of Value Stated and Illustrated, with an Application of it to the Alterations in the Value of the English Currency since 1790, 1823 に於て同主旨の説を唱へ、物の相對價値は「貨物に投ぜられたる蓄積勞働及び直接勞働と、斯る支出 (advance) に對する普通利潤とを加へたるもの」の量額に由て測定せらるゝも、此兩者の合計は「必然彼等貨物)が支配すべき勞働量と同一ならざるを得ず」と云へり (pp. 14, 16)。Ricardo は此書を讀みたる後 McCulloch に告げて Malthus の論は「終始誤謬なるが如し」と云ひ (Letters to McCulloch p. 151)、Malthus 其人に與へたる尺牘に於ても毫も其意見を藏むことなかりき。千八百二十三年四月廿九日附のものを以て始まり、同八月卅一日附を以て終る六通の長文書簡は悉く Malthus が提議せる價値尺度の自説よりも更に一層取るべからざる所以を論ずるものなり。而して支配せらるゝ勞働の價値尺度として取るべからざるは、其自體本來尺度の要件たるべき不變の性質を欠けるを以てなり。謂へらく。假に疫病流行の爲め人口減少して、舊の四分三に下らば、他の一切貨物に比較せられたる勞働の價値は騰貴すべし。然るに Malthus は勞働の供給の外に何等の變動なきに拘らず、之を勞働の騰貴と云はずして、諸貨物の價値下落と呼ばんとす。これ何等の進歩と稱すべからざる説なりと。(Letters to H. Trower, p. 210) Malthus に與へたる書簡中にも Ricardo は別の一例を設けて同一の理を説明す。謂へらく、二國ありて其國民の勤勉及び熟練の程度は同一なるも、其生活程度異なりて一方は馬鈴薯、一方は小麥を常食とすとせば、利潤は一方の國に於て、他方の國に於けるよりも高かるべし。貴下は又苟も勞働以外の

ものを價値尺度となさば貨幣が二國に於て略ぼ同價値なることを容認すべく、更に又二國間に廣く貿易の行はるゝことをも承認すべし。今假りに一人ありて馬齒薯國より一百磅を値する葡萄酒一樽の小麥國に於ては百十磅に賣らるべきものを輸出したりとせんか、貴下はたゞ單に一層多量の勞働を支配し得たりと云ふの理由を以て葡萄酒は輸出國に於て高價なりと云ふべし。葡萄酒は小麥國に於て曾により多額の貨幣と交換せらるゝのみならず、より多量の他の一切貨物と換せらるゝに拘らず、貴下は敢て斯く云ふならん。予は此事の進歩と認むべからざる新說なることを主張せんとす。こは一切の慣用概念を混同し、吾人に課するに一新言語を學ぶの必要を以てすべしと。(p. 216)

又曰く「貴下の予との相違は左の如し。貴下は一物は大なる勞働量を支配すべきが故に高價なりと云ひ、予は其生產に大なる勞働量投下せられたる時にのみ高價なりと云ふこと是なり。一貨物は印度に於ては二十日の勞働を以て生產せらるべく、而して三十日の勞働を支配すべし、英吉利に於てはそは二十五日の勞働に依て生產せられ、而して僅かに二十九日の勞働を支配することあるべし。貴下云かふところに從へば、此貨物は印度に於て貴く、予に從へば英吉利に於て貴きなり。此處に予の一般的價値尺度としての貴下の尺度に對する批難存す。一貨物に投せらるゝ勞働量は增加するも、貴下の尺度に於ては下落することあるべきを以てなり。こは貴下の尺度を正當にその測定せんことを期する客體にのみ適用せば起り得べからざる事なり。例へば海濱に於ける小海老の生產又は金の拾取により多くの勞働を投じ、而かも猶ほ前よりも少なき勞働に對して之を賣ること果してあり得べきや。勿論なし。然れども一片の羅紗を送るに前よりも多くの勞働を投じて、而かも猶ほ羅紗片の前よりも少なき勞働と交換せらるゝことは充分あり得べきことなり。これ予の認めて貴下の尺度を採用することを非とする決定的反對論據となすものなり」と。(p. 233-4)

Ricardo は頻りに價値尺度に關する自說の Malthus の說に優れることを反覆縷說すと雖も、彼れは、決して其自家の價値尺度が完全無缺のものなることを云ふにあらず。其態度は甚だ謙虛にして、Malthus の謙虛ならざるを責むる語氣の嚴しきと好對照をなせり。即彼れは或はその從來爲し來れるところは、畢竟完全無缺なる

價値尺度なるものを發見するの極端に困難なる事を漸次に覺れることに外ならずと云ひ(p. 230)、又「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精確なる價値尺度を與へたりと主張することにあり。予は此權利主張に反對す。予は成就し、貴下は失敗せりと云ふにあらずして、貴下も予も共に失敗せること、而して一人の爲し得るところは、大多數の場合に適用し得べく、多くの場合に於て甚しく正確より外るゝことなき價値尺度を發見するを以て盡くること是なり。予の自ら得たりと嘗て揚言し、今現に揚言するところは是を以て盡く。貴下にして是よりも大なる權利主張を爲すことなからんか、予は更に謙遜なるべし。たゞ予は、貴下がその志せる大目的を成就したりと揚言するを容認すること能はざるなり。君に答ふるに方りて、予は實に君がそれに依てのみ破らるべしと云へる武器を用ゐつゝあるものなり。而して予は告白す、此武器は貴下の尺度に對しても予の尺度に對しても等しく適用せらるべきものなり。予が謂ふところは絶對的價値の尺度なるものなしとの論是なり。此の如きものはあることなし。貴下の尺度も予の尺度も貨物生産に要せらるゝ勞働の增減よりして生ずる變動は之を測定すべしと雖も、困難は勞働と利潤とに歸屬する比例の異同に關して存す。是等比例の變動は、諸物の相對價値を、之に包含せらるゝ勞働及び利潤の大小に應じて變更す。而して是等の變動に對しては未だ嘗て何等の價値尺度存ざりき、而して予はその遂に存せざるべきを信ず」と云へるなり。(p. 237)これ其死(千八百廿三年九月十一日)に先だつこと一月(同八月十五日)の事なり。

以上述ぶるが如く、Ricardo は頻りに價値論確立の困難を說き、自他の學說の共に完全に遠きを嘆ずるに止まりて、何物をも新たに積極的に主張することなかりしを以て、此等の書簡集は以て彼れの價値學說將來の發展方向を豫測せしむるの資料となすべからず。吾人は Ricardo の平生より推して長く價値學說を此の如き不滿足の狀態に放置するは、恐らく其の甘せざるところなりしならんと云ひ得るに止まるのみ。進んで彼れが其完成を何れの方向に求めたるべきかを推測するは、根據なき一の好事詮索に終るべきなり。(未完)